

連載

# 58 在宅医療奮闘記

平成7年より  
在宅を開始した

## 私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長

橋本 満義 (64歳・内科)

### 「お迎えはいつ？」と聞く患者さん 「天国は満室だから、まだですよ」と答えるかかりつけ医



昭和10年生まれの女性M.Oさんとは、平成7年ころに在宅患者さんの紹介者として知り合いました。やがて月日は流れ、平成15年夏ころ、今度はM.Oさんご自身の在宅医療を開始することになりました。

病状は、身体の具合が悪く、食欲低下や歩行困難でした。検査をしてみると、心不全、甲状腺疾患、パーキンソン症候群などの病名が出ました。その後、高度機能病院で精査を行い、専門医の診断にて、大脳皮質基底核変性症という難病であることがわかったのです。

これは、M.Oさんと私のある日の会話です。

「先生、私は天国へ行けるかね～」

「大丈夫ですよ」

「なぜ？」

「それは、あなたが欲張りではなく、日々自然な気持ちで生活しているからです。しかも、すでにあなたは天国にいるようなものです。その後はその延長なんですよ。無理に偉ぶる人は、自らがビルの屋上に立っておきながら、落ちやしないかという恐怖心を持っているため、すでに地獄にいるようなものなのです」

このやりとりでの私は、まるで禅問答もどきをさせられているヤブ医者のようなものでした。

現在のM.Oさんは、傾眠傾向の時間が長くなってきてはいますが、施設ではなく自宅での療養を強く希望されています。

現在、超高齢化社会の到来を迎え、経済も地方はまだ不況感が漂っています。しかし、ダイバーシティ(多様性)スクラムを取り入れ、地域のノーマライゼーション(老若男女・障害者や子どもも普通の生活ができる地域社会をつくっていくという考え方)に事業として寄与している会社は元気なものです。例えば、独居高齢者宅への安否確認と商品の宅配とかがあります。地域包括ケアとして取り組み、自ずから“絆”も生まれ、高度成長期に破壊された日本古来の良き文化も再構築されるでしょう。すなわち社会保障は、視点を変えると内需拡大など多いに寄与するもので、国は医療・介護療養費減額をするべきではないのです。

「物事は、見方によって価値が見いだされ、幸せにもなる」とは、老荘の思想です。死の恐怖から逃れるには、私欲を出さず自然体でふるまい、「天国は今、満室である」と思えばよいのです。

## 「お医者さんが来てくれる」

### 24時間・365日態勢で対応(松山市全域)

私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。



#### 医師数 19名

(常勤6名、非常勤13名)

#### 内科・外科専門医 16名

(国立がんセンター勤務歴有3名)

#### 精神科専門医 2名

(ペインクリニック科)

#### 麻酔科専門医 1名

(ペインクリニック科)

#### 末期がん治療(緩和ケア)

#### 相談室開設!

Hyper Blood Viscosity(高血液粘度群)を科学する  
臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

## (医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>